

英語科担当の指導主事の先生方

中学校英語科担当の先生方

教科書の英語への理不尽・不穏当な批判について

—M. ピーターセン著『日本人の英語はなぜ間違えるのか?』への意見—

中学校英語教科書『サンシャイン』著者代表 新里 眞男

立春とはいえまだまだ寒さが厳しい今日この頃ですが、先生方には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平素より文部科学省検定済英語教科書『サンシャイン』（開隆堂出版株式会社発行）に対しまして深いご理解とご活用を賜り、著者一同心より感謝申し上げます。

現行学習指導要領に基づく平成 24 年度版『サンシャイン』が全国の多くの中学校で活用され始めてから丸 3 年が経過しようとしております。この間、先生方からは、グローバル化が一層進展する地球社会で必要とされる高い英語コミュニケーション能力をもつ若き日本人を育てるために意欲的な工夫がなされている教科書であるとの評判をいただいております。採択初年度には、『サンシャイン』の新しい取組などに戸惑われた先生方も一部おられました。3 年を経過する中でだいぶ慣れていただき、充実した授業が行われてきているとの情報を得ております。

そのような折、正確に申しますと昨年 11 月末に、明治大学のマーク・ピーターセン氏による『日本人の英語はなぜ間違えるのか?』という本が出版されました。その内容は、学生がピーターセン氏の「英作文」の授業の中で書く英文の間違いの多くが現行の中学校教科書が原因であるとするものです。この本の帯には「英語下手の原因は中学校の教科書にあった!？」と書かれています。巻末の引用文献には中学校検定教科書のうち 5 種類の教科書がリストアップされており、『サンシャイン』もその中の 1 つとして挙げられています。これらの 5 種類の教科書の中にはピーターセン氏が考える何らかの英語の「間違い」が含まれていることとなりますが、その中でも『サンシャイン』からの引用は全体の引用のうち、かなりの数を占めているのではないかと思います。

この本を読まれた先生方はきっと不安を感じられたことでしょう。毎日使っている教科書に、あの著名なピーターセン氏によって指摘された多くの間違いが含まれているとなると、穏やかな気持ちで指導ができなくなっているのではないかと危惧しております。

著者である私たちも一瞬「まさか?」「そんなことが?」と大きな驚きを感じました。しかし、あれだけ繰り返し検討を重ね、ネイティブスピーカーの先生方の意見も伺いながら編集し、さらに文部科学省の検定も受けている『サンシャイン』がそんなに間違いだらけのはずはありません。そう思い直し、ネイティブスピーカーの先生方を含めた主だった著者で緊急の編集会議を開き、ピーターセン氏の指摘の一つひとつをつぶさに検討してみました。

その結果、以下のことがわかりました。ここに掲載いたしますのは、今現在はっきりご説明でき、ご理解をいただけることだけにいたします。今後、ピーターセン氏の指摘に対して正面からきちんとお答えする機会を設ける（例えば開隆堂のホームページなどで）ことを予定しております。

1. 明らかにピーターセン氏の誤解にもとづく指摘がある。

例 1 : *Sunshine* (以降 SS と略す) 2 年 p.89 の He grew up at Sergio's home. の at は誤りで in とすべ

きであるとピーターセン氏は指摘しているが、この home は単なる「家」ではなく、Sergio 氏が運営する「孤児院」を意味しているので at のままでよい。（ピーターセン氏は本文をきちんと読んでいるのだろうか？）

例 2 : SS 1 年 p.43 の You save the kids! の the を削除するようにピーターセン氏は指摘しているが、この the kids は教科書の挿絵中のポスターの子どもたちを指して言っているので、この the は削除する必要はない。

例 3 : SS 3 年 p.45 の Bombs were dropped on Tokyo every day. の部分は歴史的事実と異なるという指摘をしているが、そもそもこの課は「物語」であるので歴史的な真実性に縛られることはないと同時に、原作『かわいそうな ぞう』に書かれている文章を英文に書き直したものであるので、仮に歴史的に正しいかどうかの論議をするにしてもそれは原作を対象にして論じられるべきものである。いずれにしても、この課の文章は物語なので、fiction として作者が伝えようとしている全体的なメッセージを把握することが大切である。

2. ピーターセン氏が自分の個人的な「語感」を絶対視して指摘しているものがある。

例 1 : SS 3 年 p.45 の If bombs hit the zoo, dangerous animals will get away and harm the people of Tokyo. の the は「東京の人たち全員」という意味になってしまうと指摘し、削除すべきであるとしている。しかし、著者のネイティブスピーカーの先生は「東京のある地域の人々が危険である」という意味であるので、このままで OK であるとしている。Michael Swan の *Practical English Usage* (3rd Edition) の 69-3 (p.61) には the music of the 1960s や the butterflies of Africa の例を挙げ、特に <of + 名詞> の修飾語が続く場合には <the + 名詞> は「全部」を示すのではなく“half-general”を表すとしている。ちなみにピーターセン氏はこの文の中の harm は hurt にすべきであるとしているが、これも harm でよいと考える。

例 2 : SS 2 年 p.43 の “Does it work?” “I hope so. But I didn't test it yet.” の yet は、yet があるので、I haven't tested it yet. と現在完了形にすべきだとピーターセン氏は指摘をしているが、yet は例えば小西友七『英語基本形容詞・副詞辞典』（研究社出版）に「まだ…していない」「もう…しましたか」のように行為の完了を表す場合、米国語法では過去形を使うことがあると解説している。そして、Did you call Annie yet? という例を示している。前掲の M. Swan の書にも Did you pay yet? (AmE) という例文が出ている。アメリカ語法では使うようである。まして、第 2 学年では現在完了形は未習なので、ここでは過去形を使ったものである。

例 3 : SS 3 年 p.55 で回転寿司の創始者である白石氏を Mr. Shiraishi と呼んでいることに対して、発話者がこの白石さんと交友関係があったわけではないのだから Mr. をつけるべきではないとピーターセン氏は指摘している。しかし、編集会議ではこの指摘はピーターセン氏個人のスタイルであり、特に問題はないとされた。その他の箇所にもピーターセン氏の固有のスタイルから指摘されたものが多いとの意見が出された。

例 4 : SS 3 年 p.17 So he and his family now live in Kagoshima. のような So を日本人は使いすぎる傾向があるとピーターセン氏は指摘している。彼は、So は「だから、当然なことに」という「当然の結果」を表す時に使うべきもので、この文のコンテキストのようにあまり「当然性」がないときに使うのはよくないとしている。そして、and を使えばよくなるとの提案をしている。しかし編集会議では、これもピーターセン氏の個人的な意見であるとされた。さらに、ピーターセン氏の書き換え案である He used to live near me, but his father now works in Kagoshima, **and** he and his family live there, too. という文は、1 文の中に but と and が同居しているので、この方がおかしい

という逆指摘がされた。So に関しては他にもいくつか指摘されているが、いずれも「問題なし」という判断になった。つまり、So は強い理由が示されていなくても使えるということである。(例：SS 3年 p.38 の So I decided to be a student. や p.113 の So I love anime.)

3. ピーターセン氏が学習指導要領の内容や、中学生という学習者の年齢や学習段階を十分理解していないための指摘がある。

例1：SS 2年 p.69 の “If I’m rich, I’ll give all the street children food, clothes, and love.” とリオデジャネイロの street child の発言について、ここは仮定法を使うべきところであり、仮定法が使えないのであれば教科書を作るときにこの文を入れないようにすべきだとの指摘をしている。ピーターセン氏は仮定法が中学2年生では使えないことは知っているようだが、高等学校ではしっかり学習するはずであることや大学生になっても仮定法を使えないのは中学校の教科書で扱っていないからだと論じるのは、学習指導要領の仕組みや内容を十分に知らないと言える。著者のネイティブスピーカーは当該の少女の発言内容を伝える英文として教科書どおりでよいとしている。

例2：SS 2年 p.39 に A: I made some sandwiches for you. B: Sandwiches? What kind of sandwiches did you make? の対話で sandwiches が繰り返し使われていることに対して「読み手をいらいらさせる『繰り返し』」と指摘している。そして最後の文は Sandwiches? What kind did you make? で良いとのことである。この文でも <what kind of+名詞?> という形がしっかり定着していないと思われる中学2年生には、むしろ教育的・指導的な配慮から sandwiches を繰り返してもよいのではないかとネイティブスピーカーの著者は言っている。名詞を代名詞に変えて、なるべく同じ言葉を繰り返さないように努めるというのは英語の特徴だが、それも学習段階を追いながら少しずつ実感しながら学んで行くべきものである。

4. ピーターセン氏の指摘自体に疑問があるものもある。また、中学生には難しかったり、学習指導要領に沿わなくなっていたりするものもある。

例1：SS 3年 p.61 の Cartoon of Birds and Animals という表現について、birds は animals に含まれないのかと言いたくなる、と指摘している。しかし、たとえば LDCE (2012) の animal の項では第1義として a living creature such as a dog or cat, that is not an insect, plant, bird, fish, or person とし鳥や魚を含めていない。鳥などが含まれるのは第2義であり、OALD や COBUILD でもほぼ同様の定義がされている。また birds and animals の用例をコーパスで検索すれば多数見られる。

例2：SS 3年 p.38 の I hear you’re from Hong Kong, right? の right で確かめようとしているのは I hear の部分になるので不自然だから right? を削除すべきである、という指摘をしている。しかし、著者のネイティブスピーカーはこの文全体がインタビューの際の定型的表現なので問題なしとしている。ピーターセン氏は、right? の部分を切り離し、別な文に仕立てて Is that right? とすることや、right という言葉にとらわれないとしたら Is it true (that) you’re from Hong Kong? にすることを提案している。しかし、SS のネイティブスピーカーの先生は、前者は尋問風であり、後者は警察風であると言っている。

例3：SS 2年 p.75 の I will win a professional golf tournament. は、プロゴルファーの石川遼が小学校6年生の時に書いた「将来の夢」を英文にしたものであるが、ピーターセン氏はこれを I hope I will win ~. のようにすべきだと指摘している。元の文では「予言」になってしまうので、単なる夢であればこの形が良いとの説明である。石川遼少年がその後プロゴルファーとして活躍しているので、自ら「予言」したと解釈しても良いとも思えるが、むしろここは石川少年の「強い決意の表れ」と解釈して、元のままの方がよいと考える。日本語の原文と対比すると「単なる夢」としな

い方がよいと思われる。

他にもありますが、ピーターセン氏の指摘の多くは妥当なものではなく、『サンシャイン』は中学生用の教科書として適切な英語で書かれていると言えます。ピーターセン氏は、中学生という入門期の学習段階にある学習者に対してどのような指導段階を踏むべきかに対して十分な理解をしているのでしょうか。さらに、教科書作成に関しては学習指導要領にもとづく教科書検定があり、その基準を遵守するために様々な配慮や工夫をしていることをご存じでしょうか。

例えば、ピーターセン氏がこの著書で取り上げている間違っただけの英文を書いた学生は、現行（平成24年度版）の『サンシャイン』（だけでなく他の教科書も同様）を使った学生ではありません。現行『サンシャイン』を使い始めた生徒はまだ大学生にはなっていません。そのことを知らずに、ご自身が指導している大学生の間違いの原因を直接「現行」の中学校教科書に求めているとしたら、あまりにも事情を知らなすぎます。逆に、敢えて意図的に現行の中学校教科書と今の大学生の英作文の間違いを結び付けようとしたのなら、その意図は何なのでしょう。まして、中学校のあと高等学校でも英語の授業を（多くの生徒が中学校の2倍近くの時間数をかけて）受けていることを考えると、中学校英語教科書にだけ責任があるかのように論じるのは、あまりに短絡的であり、実証的な研究者としての態度ではないと思われます。この本は一般人のウケを狙ったジャーナリスティック、センセーショナルなエッセイという位置づけなのかもしれませんが、大学教授という責任ある立場の方であれば、きちんと実証的なデータや資料を示して論じていただきたいと思います。

さらに、SS3年 p.48 の *Tonky and Wanly could no longer move. They lay down on the ground, but their eyes were beautiful.* という箇所に関するピーターセン氏の意見（「動けないはずなのに倒れた」はおかしいという指摘と、*but* の使い方は論理的ではないという指摘）は字面の表現にとらわれ過ぎており、あまりにも冷たい解釈であると思われます。そんな心ない読み方をする方なのでしょう。

もちろん、私たち『サンシャイン』の著者はピーターセン氏の指摘された点について再度時間をかけて謙虚に検討を続けたいと思います。そこでもし間違いが確認されたり、より良い自然な表現や説明方法が見つけれられたりしたならば、今後訂正や改良をして行きたいと考えております。今回指摘された項目についての私たちの反論や考察、対応策などについては、開隆堂で出されている『英語教育』誌や同社のホームページで発表してまいりたいと考えております。

先生方はピーターセン氏の著書を読み、ご不安やご心配など複雑な思いを抱かれたことでしょう。しかし、以上のように短時間で検討しただけでも、この著書はピーターセン氏独自の個人的な「語感」によるやや一方的な指摘が多いと考えます。どうか不安や心配の念を払拭していただき、安心して『サンシャイン』を使い、毎日のご指導に当たっていただきたいと思います。そして、今後の私どもからのメッセージに注目していただきますようお願い申し上げます。

私たちは、先生方が毎日の授業の中でよりよいご指導ができるよう、今後とも力強くたゆまぬ協力をさせていただきたいと思っております。先生方のご理解を心よりお願い申し上げます。

以上